

令和2年1月3日

南の風 326

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

明けましておめでとうございます。本年も『南の風』をどうぞよろしくお願い致します。

前号の続きです。全国大会出場を決める大会についてですが、事前に県協会からは、「ゲームや大会の勝敗で出場チームを決定するのはいかがなものか」という提言がありました。

しかし我々当事者としては、話し合いで県代表を決めるわけにもいかず、内々で大会（外部には全国大会出場を懸けたものとはせず、名目は交流の大会として）を行い、全国大会出場チームを決定し、県協会へ報告することにしたのです。

大会結果です。男子は大正チームが断トツで優勝しました。出場チームの中ではずば抜けた強さで、他チームを寄せ付けませんでした。一方女子は、決勝で大正対常盤台が対戦しました。この試合が後に語り継がれる大接戦となったのです。

前半、後半を通じて一進一退の攻防が続き、20分（10分ハーフ制）では決着がつかず、延長戦に入ります。5分の延長戦をやりますが、両チームとも譲らず同点のままです。第2延長に入りますが、ここでも相手が得点すれば、こちらも入れ返すという攻防が続き勝負がつきません。

両チームの選手は、ここまで4試合を戦っています。体力も限界です。これ以上延長戦を続けることは選手の体調を考慮して止めようということになりました。大会規定がまだありませんでしたので、審判の方と泉野先生と私が相談して、フリースローで勝者を決めることにしました。両チームの代表選手が一本ずつ打ち決着します。両方が入らなければ、決まるまで続けることになります。

一人目が打ちますが、両チームとも外します。続いて二人目が打ちます。大正の選手が外した後、常盤台の選手が見事に決めます。劇的な幕切れとなりました。

こうして大会は終了しますが、泉野先生とも相談して、男女とも決勝に残ったチームを合同にして全国大会に参加することにしました。

昭和49年度の第5回全国大会は、昭和50年3月下旬に行われました。会場は学習院大学（東京目白）体育館と近くの小学校の体育館でした。因みに、代々木第1、第2を使用して行うようになるのは、第17回大会（1986）からです。主な競技規則は、以下の通りです。

4クォーター制（6分×4）で使用ボールは5号のゴムボール、リングの高さは2m60cmです。選手の出場人数や時間及びプレーの規定は、旧ミニバスルール（1974年までのもの）の下で行われました。足りない規定については一般のものを採用していました。

試合形式は、出場チームを4、5チームに分けた交歓リーグ戦です。二日間で一日2試合という日程でした。結果は2勝2敗でした。普段3m05cm、6号の皮ボールで練習している神奈川のミニバス選手にとっては、全国大会のリングの高さ、ボールの大きさはハンディキャップになったことは事実です。また、他県の選手は、ユニフォームをもちろんジャージまでピシッとそろえているチームが多い中、常盤台チームは、濃淡の濃色ユニフォームはサッカー（球技大会用のもの）用、淡色は体操着でした。それに胸や背番号を貼り付けて着用しました。今振り返ると懐かしさでいっぱいです。